



水道から給水!?

「現在所有する農地等の全てを村田克幸に渡す事とします。」

リンゴの摘果作業が終わりを向かえる6月末、りんご農家を営む村田克幸さんの祖父が急死。祖父が残した遺言書には、リンゴ園の全てを渡したい旨が書かれていた。

一級塗装技能士として塗装業を営む村田さん。「何事も挑戦」という気持ちで4年前に独立し、カツ塗装工業を開業させた。□□ミで村田さんの腕利きが広がり、仕事軌道に乗る中、突如訪れたリンゴ農家への道。彼がリンゴ農家との兼業を決意した出来事に迫ります。

園地状況等の把握

「先輩！ 急にリンゴ園を渡されたんですけど、どうすればいいですか？」



職人技が光る

突然、訪れたリンゴ生産への道 ～祖父が残してくれた足跡を頼りに～

カツ塗装工業 代表

×

新規就農者

村田 克幸 さん (30)

- # JA相馬村
- # リンゴ生産者
- # 新規就農
- # 新規就農支援
- # 兼業農家
- # 塗装業

兼業



祖父の足跡が綴られたノート

村田さんの中学時代からの先輩にあたる、当JAの齊藤指導員へ一本の電話が入った。村田さんから連絡を受けた齊藤指導員が園地を訪れ、まずは品種構成や病害虫の発生状況、必要な資材や農機具等の現地確認を行った。

祖父が6月中旬まで営農していたことから道具は全て揃っており、園地は一つ成り摘果まで終了していた。そして、村田さんに渡された遺言書などが入った書類の中に一冊のノートがあった。そこには、6月中旬までの薬剤散布経過や作業実施内容が記されていたほか、過去の作業記録やリンゴの収穫日、収量が細かに書かれていた。

村田さんは以前、祖父の収穫作業等を数回手伝ったことがあったが、祖父が自分に経営移譲する意思があったことは全く知らなかったと打ち明ける。もし、村田さん



農薬の投入量を量る

が畑を継がないにしても、リンゴ樹を伐採しない限りは病害虫等で近隣へ迷惑を掛ける可能性もある為、塗装業が忙しい中でも薬剤防除を実施しなければならぬ状況だった。祖父の倉庫にあった農薬の在庫を把握し、今後の防除計画を再度組み立て、翌日には薬剤散布を実施することを決めた。そして、また分らないことがあれば連絡するよう求め、齊藤指導員はその場を後にした。

元々機械好きだった村田さんは、You Tubeでスピードスプレーヤ(SS)の操作方法を調べ、ワクワクしながら見様見真似で薬剤散布に挑戦した。後日、齊藤指導員に薬剤散布を無事に終えたことを報告し、「初めてSSにエンジンを掛けた時は感動し、非常に楽しかったです。でも、SSに給水する際



井戸と農業用ポンプを発見！

は水道で約1時間掛かり大変でした」と伝えた。それを聞いた齊藤指導員は、「給水に1時間!？」と驚いた。普段、農家との薬剤散布の会話に「給水方法」という内容がなかったため、そこまでの指導は頭の片隅にも浮かばなかった。新規参入者への指導は、今までは違つ目線が必要だと齊藤指導員は考えを新たにしようとした。

未知の世界へ羽ばたく

初めての薬剤散布の、あの楽しさがきっかけとなり、村田さんは兼業農家として歩むことを決意。また、指導を受けることの重要性を知ったことからJA相馬村の准



先輩後輩の仲が生産者と指導員の関係へ発展

組合員となり、齊藤指導員と二人三脚での栽培管理がスタートした。

▼薬剤散布

齊藤指導員は、農業用水が必ず近くにあるはずだと考え、園地を見渡すと井戸を発見。その横にはブルーシートに覆われた農業用ポンプも見つかった。村田さんは井戸と農業用ポンプの存在に全く気付いていなかったことから、驚きを隠せない様子だった。

早速、農業用ポンプの使い方を教わり、SSに給水。数分で一気にSSのタンクが満杯となり、村田さんは感動していた。また、SSの散布ノズルに目詰まりが無いが始業前点検を実施。その後、農

薬の混用順序や希釈倍数を確認しながら調合し、SSの操作方法や散布圧、散布速度について指導を受けた。

▼摘果作業

仕上げ摘果が残る中、村田さんは齊藤指導員から摘果の目的や中心果と側果の区別、より良い中心果の選択について説明を受けた。村田さんが兼業を決意したことにカツ塗装工業の従業員も奮起し、総出となつて仕上げ摘果に取り組んだ。

リンゴは最初から1つ成りだと思っていたことから、実際に作業をしてみると思った以上に気が遠くなったという。

▼思いがけない伐採

仕上げ摘果が終わりに安堵する頃、大きな丸葉樹の片腕が折れているとの連絡が入った。すぐに現場へ駆け付け確認すると、フラン病等



ムラの無い散布を指導



初のチェーンソー作業

の影響で樹が弱っていたことに加えて着果量も多く、枝受け支柱もしっかりと設置されていなかったことから、主枝の付け根から欠落していた。

再生不能なことから伐採することとを決断。枝に成った果実を全て取り除くことから始め、チェーンソーを使って伐採した。伐採の仕方によっては、切断した樹が自身に降りかかってくる危険性もある為、指導を受けながら慎重に作業が進められた。また、自身が持っていたチェーンソーは、刃の手入れが不十分で中々切断できず、手入れされたチェーンソーを使って切れ味の違いを確認しながら日々のメンテナンスの重要性も感じていた。

▼着色管理

9月中旬、中生種の早生ふじの陽光面が色づいてきた。リンゴは満遍なく勝手に色付くものだと思う

ていた村田さん。齊藤指導員から葉摘みや玉回しを教わり、着色管理を進めることとなった。葉摘みについては品種ごとに時期が異なる為、一つ一つの樹に品種名を記入した印を付けて実施し、その後は反射シートを敷くなどしてより良い着色を目指した。

▼収穫作業

10月上旬、早生ふじが無事収穫を迎えた。初めての収穫である。JAでコンテナ等の貸し出し手順と入庫方法を教わったほか、軽トラに積んだコンテナが落下しないようにロープで固定する方法も確認。塗装業でも脚立等を固定するため、ロープの扱いは齊藤指導員よりも手早く、逆に指導を受けるほどだった。

収穫は従業員みんなで実施し、押し傷や土壌菌が付かないように注意しながら作業した。村田さん



従業員みんなで奮起



JA青森中央会主催の栽培技術研修会にも参加

は選果を担当し、選果基準を指導するために初日は齊藤指導員が一緒に実施した。

しかし、翌日一人で選果したりリンゴを確認すると、着色度合いや下位等級品の線引きにズレが生じ始めていたことに気付いた齊藤指導員。選果が緩むことで1箱当たりの単価が左右されるほか、リンゴの精算額が想像以上に低くなること、村田さんの今後の継続意思に大きく影響を及ぼす可能性があることを懸念し、収穫が終わるまで付きっきりで指導することとした。村田さんは、「齊藤先輩が指導してくれているときは何となく理解できているが、やはり着色度合いや、どこまでのキスがクス美で、

どこまでが加工という物差しが全くないため、とても苦労した」と振り返っていた。

▼収穫を終えて

「おじいちゃん！ やってやったぞ！」。全ての収穫を終え、村田さんが最初に感じたことだった。また、収穫時に病害虫防除や着色管理の重要性を従業員みんなで痛感し、それぞれの作業に一つ一つの意味があることを再認識していた。

収穫後、JAの入庫伝票から本年産の出荷内容を集計した。これは、下位等級品が生まれた要因の精査、品種構成等の経営の見直しを図る為である。リンゴの中生種の繁忙期が塗装業の繁忙期と重な



高密植わい化栽培の最先端技術を学ぶ



あこがれのキャビンに興味深々

るため、今後は晩生種だけに絞ることとした。また、園地には老木やフラン病が散見された為、着色優良系統ふじへの更新も踏まえて苗木の選定や経費の試算などを行い、今後を見据えた。「来年はもっと良いリンゴを作れるように努力し、将来はキャビン付きのSSを購入することだ」と機械好きらしい目標を掲げていた。さらに、JAと一緒に研修会や優良園地視察へ参加したことで、高密植わい化栽培にも意欲を示していた。

村田さんがスムーズに就農できた理由

▼万一に備えた準備

村田さんの祖父の場合、不動産の登記や重要書類を整備していたこと、今までの足跡を綴った一冊のノートを残したことがスムーズな



本年を笑顔で振り返る村田さんたち

継承へと繋がった。これからの人の為に、祖父が準備を進めていたことが非常に活かされたと言ええる。

▼農業用機械等が揃っていた

村田さんの場合、SS・乗用草刈機から収穫力ゴまで必要なものが全て揃っており、万全な体制でスタートを切ることが出来た。新規就農者が抱える問題の一つとして挙げられる設備投資に係る資金難は、祖父が残した農業用機械で全て補うことが出来た。

▼JAの指導的役割

現在、ネット社会が急速に進化する中で、You Tubeなどで多くの情報が得られる時代となった。しかし、実際の現場では、その情

報だけでは実践に活かされないことが非常に多く、新規就農者にとってはもっと奥深くまで説明する必要がある、今回の齊藤指導員のようにつつ細かいところまで説明する指導的役割が功を奏した。畑違いの村田さんにとっては、放射シートやマメコバチの巣など、用途が全く分からないものも多く、齊藤指導員が教えていなければ処分する予定だったと村田さんは話していた。

今回の事例では、この三つの要

素が上手く噛み合い、スムーズな就農に結び付きました。これは、親元就農や第三者継承においても同様であります。就農までの手続きが煩雑であること、必要資材や機械の準備資金が用意できないこと、そして、これらを相談する相



品評会で更なる向上心が芽生える

手がいないことが経営の安定を阻む要因となるのです。

就農へのきっかけや目標は、どこに転がっているか分かりませんが、それを一緒に見つけたり支えることもJA指導員の大きな役割だと改めて痛感しました。

今後は、農作業や自分の経営内容の記帳、各種手続きの重要性を研修会等で発信していくとともに、継承者が「農家をやりたい」と思える経営内容を提示できるように、指導員をはじめJA全体がスキルアップしなければならぬと感じました。当JAは、今後も現場の最前線でサポートし、明るい農業を築いて参ります。



心をひとつにして前進することを約束した